

Editorial

がん治療における副作用対策は日々進歩を遂げて、もはや治療の一部であると言っても、過言ではないのでしょう。副作用対策が充実する以前は、「治療に伴う不可避の苦痛」として、医療者——患者間に暗黙の了解がありました。しかし、副作用が徐々にコントロールされるようになってきた昨今、果たして患者のQOLもそれに伴って向上していると言えるのでしょうか。副作用対策が進み、医療情報が溢れるほどに、私のなかでそんな疑問が色濃く湧き上がってくるのです。

医療の世界のみならず、人間の探求心はとても素晴らしいものです。しかし、同時に恐ろしい性質をもっています。それは、一度得た成果の後退を許さないことです。すなわち、向上した成果を前提とした「今」こそが、常に評価基準になるのです。

この状況はまるで、アスリートにみられるオーバートレーニング症候群のようです。回復ペースを上回る、継続的なハードトレーニングによって陥る肉体的・精神的な不調がこのオーバートレーニング症候群ですが、その本質的原因のひとつは間違いなく、「いつまでも満たされない欲求」です。アスリートにとって一度獲得した成績はあって当然のもの、更なる目標こそあれど、後退は許されないのです。そしてこの欲求はアスリートに限ったものではなく、多かれ少なかれあらゆる人がもっているものです。今より環境が悪化することを望んでいる人は、いないでしょう。

更に、この状況を加速度的に悪化させるように、人は満足を求めて足掻きます。そう、人は「力む」のです。50 m走を80%、90%、100%の力で走り分けてみると、タイムはどうなるのでしょうか。興味深いことに、多くの場合実は大して変わらないのです。それどころか、80%が最も速いということも少なくありません。しかし、タイムを計るとなれば、ランナーは皆100%の力で取り組みます。よい結果(=満足)を得ることと、強く求めることは必ずしも一致しません。それでも人は、結果を求め、力を振り絞る生き物なのです。

患者は、常に「今」を生きています。だから、「過去と比べてどれだけよくなったのか」は、評価基準の外にある出来事です。きっと、いつ、どんな時代でも患者は(そして私が同じ立場であっても)こう思い、更なる満足を求めることでしょう。

「もっと身体にやさしくて、もっと苦しくない治療はないのかな」

今回、既にさまざまな情報提供がなされている副作用をテーマとするに当たっては、とにかく患者のQOL向上に寄与するものを、と考えました。カバーされている領域ではなく、進歩する医療と変化する患者ニーズ、そのギャップの間に落ち込んだ副作用を捉えたかったのです。正直なところ、企画は難航しましたが、そこで痛感したのは「患者のニーズは生き物だ」ということでした。医療が進歩した分、そこに新しい問題と要求が生まれ、日々求められるものは変わっていく。本企画は「みえない理由ごと」に整理されていますが、「みえない」という言葉は本来もっと多義的です。「知らないから、みえない」「注意を向けないから、みえない」といったシンプルな側面もあるでしょうし、「これから生まれるから、みえない」、そんな未来への指向性もあると言えるのかもしれません。当然、今回取り上げることができた「みえない副作用」はごく一部であり、見続けなければまた隠れてしまう存在でもあるのでしょう。

Feature Topicのなかで、川上和宜先生が述べた言葉、「みえないものをみようとするには、今までとは異なるアプローチが必要である」。私は至言だと感じました。日進月歩で変わりゆく医療と、多様で、飽くなきニーズをもつ患者と接するに当たって、変化の機微を捉えるアプローチはいくつも合わせてもよいのではないのでしょうか。気付かれにくいですが、確かに存在する苦痛に対しては、スポットライトを当ててあげればよいのです。この企画を通して、手にとっていただいた読者のみなさんのなかにひとつでも「みえる副作用」が増えるのであれば、この上なくうれしいことです。

「Cancer Board Square」編集室 境田